

「昭和 23 年の学制改革に遭遇した世代の『思い出の記』(その 4)」

《 相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等 》

我々は民主主義教育のモルモット^(※1)酒井雄一郎^(※2)高普 3 回卒 山本千鶴雄^(※3)山本 道雄^(※4)

我々の場合、あの古びた木造校舎で 6 年間も生活した高校 3 回卒業生である。

昭和 20 年の春、連合軍との戦いに負けるとは思いもよらず、身体検査の後、物資不足で筆記用具不要の口頭試問による入学試験を経て、北の亘理から南の双葉郡の広い地域より、220 名が四面『からたち』に囲まれた憧れの相馬中学校の門をくぐった。

入学してみたら上級生がいない。4 年生以上は京浜の軍需工場、間もなく 3 年生は石川へ学徒動員と学校を留守にしたからである。

残された我々は出征兵士の家庭を訪れての農作業、ある時は駒ヶ嶺まで行軍しての松根油掘り。そして長友を農地にするための掘り起こしや原町方部を中心に雲雀ヶ原飛行場での作業と、働くために入学したような状態であった。

でも、逼迫感はあまり無く、意外と磊落であった。国民学校時代から「御国のために死す」教育を受け、ある意味では無頓着に生育していたのかもしれない。

B-29 大編隊による郡山市爆撃の際も、日本にも四発の爆撃機が出来たと窓から喜び眺め、3 編隊が頭上を通過してから初めて敵機と知らされ、北校舎の青空の見える防空壕にて無駄口をたたきながら数十機の敵機を見送った。

8 月 15 日、天皇陛下の玉音があるというので昼に家でラジオを聞くが、雑音と難語で意味不明が大部分。でも、戦争に負けたことは理解され、今後への不安と何か希望がもてるような複雑な気持ちであった。

それからというもの、教科書を切り取ったり墨塗りをさせられたが、信頼をしていた学習内容に間違っていた部分があったのかと、純粋な精神を傷付けられた思いもした。

そして、翌年に新聞紙一頁ぐらいの教科書？が配布され、切断して木綿糸で製本したが、敗戦とは本当に悲惨なものであると知らされた。しかし、先生が教科書がわりにプリントで旧制中学の学力維持に工夫しながら指導してくれたことは頭の下がる思いもあった。

平和と民主主義の言葉がやたらに多くなったが、ノートが無い！インクがない！食べるものが無い。汽車は不定刻で、灯火管制から解放されたのに毎晩のように停電。駐留軍兵士のジープだけが格好よく砂塵をあげた。

制度は根本的に改革され、次々に民主教育の名における新しい教育が、我々生徒を実験体として実践された。

新制度により昭和 23 年に中学 3 年の卒業証書を頂戴し、相馬高等学校に編入。

サマータイムや学校週五日制の登場と制度は新しくなったが、もの不足は相変わらずで、雑多な服装や持ち物で登校し、次から次へと変化する改革の中で雑然とした 6 年間を民主主義教育のモルモットとして生活した。

しかし、排球部の連覇をはじめ、部活や大学進学において、胸を張って「やるべき事はやった」と言える我々でもある。

(※1) 相中相高百年史より。

(※2)、(※3)、(※4) 昭和 26 (1951) 年卒。中村出身。